

清流

題 字 : 芳野 充

平成30年2月28日

第14号

発行所 加来不動産(株)

発行者 加来 寛

北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに

清流のように

つかい尽くしてしまわぬが惜福^{せきふく}

思いやりの行動を具体的にあげている『日常の心がけ』の十一番目には、「水や電気の節約」とあります。前号の「ものは粗末にせず、大切にあつかう」にも共通するものがありますが、“水”や“電気”と対象をしぼっているのも、わたし個人的には行動しやすいと感じています。

近年、大きな自然災害の発生によりインフラが寸断され、ふだん当たり前と思ってつかっている水や電気が、大変貴重な存在となる瞬間を目の当たりにしたとき、水や電気は決して当たり前ではないんだ、と実感させられます。

インターネットで節水のことを調べてみると、「家庭で節水をおこなうことで節電という社会貢献も可能!」とのページを見つけました。歯磨きで口をすすぐ際、コップで水を上手につかう(一回あたり約5.4リットル節水)、お風呂の残り湯を洗濯に再利用(一回あたり約90リットル節水)、キッチンで食器を洗う際、水を出しっぱなしにせず、ため洗いを心がける(一回あたり約90リットル節水)。一人ひとりがこうした節水を心がけると、一世帯あたり年間電力消費量(約3,400キロワット・アワー/年)の約5%を節電できるとあり、節水することとで電気の節約や、社会貢献にもつながることを知りました。

また、幸田露伴の随筆『努力論』のなかで「惜福^{せきふく}」という言葉があります。「惜福」とは、自分にあたえられた福をつかい尽くさずに、のこしておく、という意味です。幸田露伴は次のように書いています。「福をとり尽してしまわぬが惜福であり、またつかい尽くしてしまわぬが惜福である。惜福の工夫を積んでいる人が、不思議にまた福に遇うものであり、惜福の工夫に欠けて居る人が不思議に福に遇わぬものであることは、面白い世間の現象である」。自分にあたえられた福でさえ、つかい尽くさないほうがよい、それが結果として幸運にめぐまれる、ということであれば、自分のものではない資源(水や電気)に対しては、より意識をしたほうが良いのだらうと思うのです。

水や電気などの資源は、けっして当たり前ではない。つかい尽くしてしまわぬが惜福。いま一度、わたしのまわりを見わたし、限りある資源を大切につかいたいと思います。

加来 寛

